

〈論文〉

唐澤富太郎、畢生の大業『教育博物館』の原点

— 幼少年期の出雲崎での人間形成 —

土 井 進

要 約

教育学者唐澤富太郎は、63歳の定年後に10年の歳月をかけて『教育博物館』上巻「日本の児童文化」(全485頁)、中巻「日本の学校文化」(全481頁)、下巻「日本の生活文化」(全505頁)、そしてこれらの「解説」(全800頁)計4巻の大著を世に送った。

本稿は、唐澤がこの研究を通して、“もの”(仮諦)には“こころ”(空諦)があり、物心は一如(中諦)していることを究明し、人間形成の本質を実物を通して実証的に明らかにしようとしたものであること、を論述した。

また、『教育博物館』をライフワークとして実現した唐澤の教育学的原動力は、新潟県出雲崎の自然的歴史的風土の中で育んだ不撓不屈の精神に由来していること、を論述した。

キーワード

唐澤富太郎 『教育博物館』 唐澤博物館 出雲崎 自然的歴史的風土

I. 序論

1. 研究の目的

1-1. 教育学の師、唐澤富太郎に師事

筆者は富山工業高校機械科における“物づくり”の道から、“人づくり”の道を志して、「教育学」専攻のある東京教育大学教育学部教育学科を受験した。当時の教育学科には、どういう学生が入って来ていたか、について大浦猛(2001)は次のように述べている。「教育学科では、試験の総得点数によって、機械的に上から合格者を決める事はしなかった。即ち、総点の他に、1科目でも図抜けて優れている事、外国語が極めて優秀である事、高校のトップ・クラスであること、職業高校の最優秀者である事等をも考慮に入れて、入学候補者とし、改めて学科の教官全員で投票によって合格者を決める事を、試みたりした。」⁽¹⁾と。

入学して直ぐに13講座の教員が交替で教育学研究について語る「教育参加」という授業があった。この授業の一コマで、聖徳太子の王者的風格について仏教哲学をもとに、音吐朗々と語った講義に圧倒

された。その講義をした人物こそ、唐澤富太郎であった。この人物の下で、仏教哲学に根ざした「教育学」を研究したいと思い、即座に師事することを決めた。

1-2. 唐澤富太郎が集めた実物とその実物が醸し出す人間形成の妙味の解明

昭和44(1969)年12月22日(月)に初めて練馬区にある「唐澤博物館」を訪問した。

大学2年生の筆者は、立派な門構えの庭に土器や壺、農具などが所狭しとばかりに置かれている光景にふれ、何とも言えない親しみと馥郁とした“教育”の香りを感じた。そして、玄関の門をくぐり博物館の中へ通されて、先ず目に入ってきたのが舟板に「教育博物館」と大書された雄渾な懸額であった。次に博物館の右手の上に掲げられた、有栖川宮熾仁親王の大きな額「教以義励以禮」の文字にくぎ付けになった。

靴を脱いで上がると、すぐ前の書棚には日本教科書体系全巻が揃っていた。左側にあるソファアの応接室に着くまでの通路の両側には、沢山の興味深い実物がぎっしりと置かれ、大正新修大蔵経を収めた立派な書棚が左側にどんと構えていた。応接間に仕切りはなく、右側に特製のがっしりとした天井まで届くような本棚が10列ほどあった。これまでに唐澤が著した書物の引用文献として活用したものであった。この中には57か国の外国の教科書もぎっしりと詰まっていた。応接間の左側の窓枠には大八車がはめ込まれていた。これらの空間から醸し出されている「学問・教育」の雰囲気、筆者は圧倒的な迫力と魅力に包まれた。

足下に置かれている一つ一つの実物を、唐澤はどのような思いで集めたのだろうか。それらの実物が醸し出している人間形成の妙味を究明したいものだと思っただけでなく、そこで筆者は、一つ一つの実物の前へ行って、唐澤にどうしてこれを集めたのか。これは何をやる物なのか。これはどこで集めたのか、などと矢継ぎ早に質問をした。その一つ一つの問いに対して、唐澤は、深くて、底力のある、響く声で、とても楽しそうな表情で解説した。その内容を一言一句も漏らすまいと筆録した。

この時の様子を唐澤は『執念—私と教育資料の収集—』(昭和45年)に、「そもそもこの書物も、私のところに訪ねてきた学生が教育博物館の中を見回して、驚きの眼をもって『どうしてこんなに沢山の資料を集めたのですか』という問いに対して話を始めたのが最初であった。学生の真理を求める謙虚な瞳に向かって、私は偽りなく自分の資料収集の苦心を率直に語ったのである。」⁽²⁾と述べている。

唐澤富太郎が教育学研究の最終段階において、畢生の大業『教育博物館』に取り組むことによって、何を明らかにしようとしたのであるか。また、その教育学的情熱の源泉は、一体どこにあったと考えられるのか。この2点を究明することが本稿の目的である。

2. 研究の方法

2-1. 『教育博物館』の製作に10年参画し、その成果を1本の学術論文に

2 博物館を初めて訪れた日、博物館の屋上で昼食をいただきながら、唐澤の遠大なる教育学研究の構想を聴いた。それは、紙上『教育博物館』を生み出そうと孤軍奮闘している内容であった。このような意義のある仕事に筆者も是非参画したいと思い、それからの10年間、東京都練馬区豊玉北にある博物館に通い詰めた。

紙上『教育博物館』上・中・下・解説の4巻(昭和52年)が刊行され、平成5年に「唐澤博物館」と改称して一般公開されたことにより、唐澤富太郎の研究業績は広く知られることとなった。しかし、『教育博物館』に関する本格的な学術研究に取り組む研究者は未だに一人も現れていない。筆者も計り知れない師恩、学恩を受けながら、未だに『教育博物館』に関する学術論文を1本もまとめることができないままである。

2-2. 淑徳大学と唐澤博物館の博学連携による学術研究

平成26年度に信州大学教育学部を定年退職し、淑徳大学人文学部に奉職することになり、学芸員資格課程の必修科目「生涯学習概論」を担当することになった。これがきっかけとなって淑徳大学と「唐澤博物館」の博学連携が実現した。学生は「唐澤博物館」の実物にふれながら、課題探究型学習をアクティブ・ラーニングとして実践し、毎年貴重な学修成果を修めている。

平成28年度淑徳大学学術研究助成費に応募した研究課題名「教育学・博物館学からのアプローチによる唐澤博物館成立過程の研究」(森田喜久男・土井進)が採択された。この研究は「唐澤博物館」について、教育学と博物館学の両面からアプローチすることによって、未開拓の分野に鍬を入れようと志すものである。今こそ師恩・学恩に報いるべき時であることを深く自覚し、この機会に何としても学術論文を1本書き上げたいと決意を固めた。

2-3. 唐澤富太郎の生家、史跡の調査研究

淑徳大学の学術研究助成の採択が決定した後、平成28年4月14日に「唐澤博物館」において「唐澤博物館」研究会を立ち上げ、森田研究代表と筆者が館長の協力を得て研究を進めることになった。研究会は5月19日、7月21日、7月31日、9月28日、11月9日、12月14日に開催された。

平成28年7月31日に、森田・土井・館長の3人で唐澤富太郎の生家がある新潟県出雲崎へ出かけ、自然的歴史的風土の調査研究を行った。この地へは1972年、大学院1年の夏に唐澤に引率されて日本教育史研究室の大学院生9名とともに来たことがあった。しかし、当時の記憶はほとんど薄れてしまっていた。

初めに天領の里を見学し、出雲崎町の地勢を理解してから石油公園を通り過ぎて、左へ曲がり真っ直ぐに進むと、一番奥に唐澤富太郎の生家を訪ね当てることができた。幼少年期を過ごした12畳間、大黒柱、檜の大戸、仏壇、神棚、呉服商の棚などを確認しながら、感慨深くながめた。しばらくその場に立ち尽くし、父、祖父たちの遺影に合掌し、唐澤の幼少年時代に深く思いを馳せた。

生家を後にして、唐澤が揮毫した「出雲崎代官所跡」の石碑を見学し、次いで唐澤家の菩提寺、萬因寺を訪ね日本海を見下ろす高台で墓参りをした。その後、妻入りの家々が並ぶ出雲崎の街を歩き、中央公民館商工会館の入り口にある「新保民八先生頌徳碑」をようやくのことで探し当てた。唐澤の撰文によるこの石碑は、小学校時代の恩師新保民八への深い感謝の念から同級生一同が建てたものである。

最後に、唐澤が陰に陽に郷土の人物として私淑し、大きな影響を受けてきた良寛ゆかりの地、良寛堂と良寛記念館も見学し、調査研究を終えた。唐澤は『無位の真人 良寛』(1991)を著している。

2-4. 教育資料探求の行動力

筆者が唐澤のお伴をして古道具屋や土蔵を訪ねた場所は、浅草、飯能、横須賀、天童、富山、輪島である。重い白を大きな唐草模様の風呂敷に包んで、2人でヨイショ、ヨイショと掛け声をかけながら運んだことがあった。その時初めて唐澤が歌を口ずさむのを聞いた。電車に乗ってから唐澤はおもむろに風呂敷を解いて、白を眺めながら口ずさんだ歌は、「快哉人生」であった。教育資料が手に入った時の唐澤は上機嫌であった。

Row row row your boat、	漕げ 漕げ 漕げ 漕げ
Gentry down the stream、	ゆるやかに
Merry merry merry merry、	快哉人生
Life is but a dream.	一朝(いっちょ)の夢

2-5. 正月早々の原稿書き

筆者が大学3年の正月、博物館2階の暖かい陽ざしの入る場所に置かれた炬燵に入って、唐澤と向かい合いながら原稿書きをしていた。そこへ年賀の来客があり、唐澤は玄関へ降りていった。門を開けて新年の挨拶をただけで、中へは通さず「今日は大事なお客様があるので」と断った。その理由がほかならぬ筆者であり、それが「大事なお客様」であったことに、唐澤の『教育博物館』にかける新年の並々ならぬ決意を感じ、襟を正して唐澤特製の大きな原稿用紙に向かうのであった。

2-6. 唐澤宅で徹夜の清書

昭和45(1970)年5月30日(土)午前中、土器の修理。午後、『執念一私と教育資料の収集一』の清書。奥座敷には仏像ばかりがたくさん並べられ、沢柳政太郎の「静其愛我」という大きな額が掲げられている。この部屋には深深とした静寂さがただよっている。部屋の真ん中に大きな朱塗りの裁ち板が置かれていた。唐澤は6月2日から1週間山形大学での集中講義が入っていたので、何とか今日中に清書を済ませたいと思い、徹夜することにした。

奥様が、夜食にエンドウ入りのご飯で作られたおにぎりとお茶を持ってきてくださった。真心の差し入れに心から感謝。夜食をいただいてお腹がしっかりとし、眠気を押さえてどうにか清書を一通り済ませることができた。

朝日が射した。カーテンを開け、窓を開く。5月31日、日曜日の朝だ。寝間着姿の唐澤に清書した原稿を見ていただく。2人だけで朝食を済ませ、勝手口から出て飯能の古道具屋へ向かった。唐澤が大金を払って教育資料を購入したので驚いた。大きな消費があった分、収集した資料を活用して、大きな仕事をしない限り、資料に対して申し訳ないし、唐澤の研究意図も達せられないのであろう。唐澤は今、庶民が生活の中で使った「遊び」「学び」「くらし」に関わる“実物”に人間形成の意義を見だし、それを表現しようとしている。筆者も唐澤が苦勞して集めた教育資料から醸し出される独特の教育的雰囲気世に伝えたいという使命感を覚えた。

II. 本論

1. 唐澤富太郎の実物による人間形成の探究

教育学者で実物による日本教育史研究の開拓者である唐澤富太郎(1911-2004)の研究活動は、東京高等師範学校並びに東京文科大学において篠原助市教授のもとでナトルプの社会的教育学に没頭することから始まった。しかし、ドイツ哲学では人生を導く「主体的真実」に迫ることはできないと悟り、東京文科大学教育学研究科でのテーマを「教育における宗教的基礎」と定め、大乘仏教の追体験的理解に没入した。特に万人が仏性を有しているという一乗思想とその伝統に立脚して、親鸞・道元・日蓮の仏教教育思想を探究した。(昭和28年に文学博士)。この大乘仏教の哲学を人間形成の問題を解明する哲理として把握した唐澤は、教育学研究の対象を日本のみならず、世界57カ国へと発展させた。

まず日本人の形成に関する歴史的解明を、『教師の歴史』『学生の歴史』『教科書の歴史』(昭和31年)の3部作として世に問うた。次いで世界の教育を、『世界の道德教育』『世界の理想的人間像』『教科書と国際理解』の3部作(昭和36~38年)として発表した。これがユネスコ本部によって高く評価され、昭和37(1962)年に西ドイツ(当時)のゴスラーで開催されたユネスコ教科書会議において3時間にわたって研究発表した。

その後、東京教育大学における日本教育史講座の担当教員として、『日本教育史』『近代日本教育史』

(昭和43年)、『図説近代百年の教育』(昭和42年)、『図説明治百年の児童史』(昭和43年)を発表した。唐澤はこれらの仕事をやり抜くことによって、内的脱皮を遂げて昭和50(1975)年、63歳で東京教育大学を定年退職した。

唐澤が定年を機に、「これが私の解放された自我への出で立ちなのである。」⁽³⁾と宣言して取り組んだ仕事が、紙上『教育博物館』上・中・下・解説の4巻を完成させることであった。昭和43年～昭和52年の10年間、唐澤は只ひたすら実物を通して日本人の形成を究明する仕事に没頭した。筆者は、この10年の歳月に唐澤富太郎の下で薫陶を受け、『教育博物館』の構成、実物の写真撮影、実物の配置・修理、実物の解説文の執筆、掃除等の様々な仕事に携わらせていただいた。毎日が「悉有仏性・師弟同行・師弟共育」の喜びを実感する日々であった。

2. 唐澤富太郎の教育学研究の根本精神

2-1. 単なる実証を越えて教育の精神に迫る

唐澤富太郎は、自らの教育学研究において根本精神とした信条を次の2つの資料において吐露している。一つは『東京教育大学閉学記念誌—教育学部—』(昭和53年)に書き残しているものである。「私がやはり大塚の学風のもとに育った一人であることを実感するのも事実である。根本資料にとりくみながら単なる実証を越えて教育の精神に迫ろうとすること、学ぶことを通しての過去、現在の人間的ふれあいを大切にすることを私は言葉としてではなく学びとってきた。これはいつまでも失いたくない。そして研究室の諸君にも失って欲しくないと思うことである。」⁽⁴⁾

唐澤は、昭和26年6月に東京教育大学高等師範学校教授に補され、7年間の奈良女子高等師範学校での勤務に終止符をうち、新制大学として発足した東京教育大学に戻ってきた。以後昭和50年4月1日付で定年退職するまで、文京区大塚のキャンパスでの教育研究生活に打ち込んだ。この年は東京教育大学が学生募集を停止し、筑波大学に人間学類が開設された年でもあった。東京教育大学の始まりと終わりが唐澤富太郎の着任と定年退職に重なり合っていたことは、時の不思議な巡りあわせというほかない。

東京教育大学での唐澤の担当授業科目は、「日本教育史」と「教育原理」であった。それまで仏教研究一筋にきた唐澤にとって、これらの授業準備は大変であったが、熱心で優秀な学生たちにこたえるためにも、唐澤は真剣に講義の準備に取り組んだ。唐澤は、自分の研究を進める場合にも、学生の指導に当たる場合にも、つとめてオリジナルな資料を集め、実物のもつ迫力を肌で感じ取りながら歴史を学んでいくことを強調していた。

2-2. 逆境が人間を作る、研究に求められる内的脱皮

唐澤が、教育学研究において根本精神とした信条が語られている二つ目の資料は、『執念—私と教育資料の収集—』(昭和45年)である。この中で、「研究には飛躍があってはいけないということであり、すなわち、研究は内からの積み重ねでなければならないということと、研究というものはいかなる場合にも自己の内的脱皮でない限り真の深まりはないと思います。流行のみを追っていたのでは、ものにならないんだということを繰り返したいと思います。」⁽⁵⁾と、烈火の如く厳しく指摘している。

唐澤がこのことを強く主張するのは、戦時中には猫も杓子も『万葉集』だ『古事記』の研究だといって騒いでいた連中が、終戦になるや否やそれまでの研究テーマを弊履のごとくに棄て去って、アメリカのデューイなどの研究に飛びついて行った姿を睨と見届けてきたからである。唐澤は呆然とするほかなかったという。あれだけ戦時中に努力をして日本の文化についての研究をしてきたのに、少しも研究業績としてまとめないうちに、つぎつぎと調子のよい流行の研究テーマに乗り換えていったからである。

唐澤はこうした調子のいいアメリカ研究者の群れから一人離れ、戦時中も戦後も仏教の研究一筋に没入した。地味な研究テーマに取り組んでいる唐澤には、僅かな俸給以外は一銭の副収入も入らなかった。近くにいたある教官などは、「あなたは頭が少し変ではありませんか」⁽⁶⁾とからかったという。景気のいい友人の派手な活躍をそばで見ながら、あえて仏教研究に沈潜した唐澤は、「この寂しさと不景気さを堪え忍んだことは、私の人生で、人間を作る上に大いにためになった。」⁽⁷⁾と誇らかに受け止めている。

研究におけるこの厳しい叱咤に触れる時、筆者には今も耳朶に残る師の厳愛の指導が思い出される。それは、「教育における模倣と創造」について論述する大学院博士課程の入試問題において、筆者は考えがまとまらず6割しか書けないで時間切れとなった。このあとの面接試問を受ける気力を失い、昼休みに午後の面接を辞退したいと唐澤に相談した。この時に百雷が一度に落ちたような厳しい指導を受けた。

「試験に受かる、受からないはもはや問題ではない。せっかく君のために15分間の面接時間が設けられ、全講座の教官が一堂に会して試問してくださるといふ2度とないこの機会を逃してはならない、この機会をしっかりと生かすことだ！これが事上錬磨ということだ。」⁽⁸⁾と。面接試問が終わった後、憔悴しきっていた筆者を夕食に連れ出して、「一度や二度の挫折で教育研究の道を放棄するようでは、どの道に行ってもモノにならない。目標を見失わずに精進しなさい。」⁽⁹⁾と温かく励まして下さった。そして、次の言葉を短冊に認めて下さった。「我々は生きた年数によって老いるのではない。理想を棄てることによって老いるのである。歳月は肌にしわを刻む。しかし、情熱を失えば魂にしわが刻まれる。(愚徹)」⁽¹⁰⁾

この時の厳訓があったお陰で筆者は、社会教育指導員、社会教育主事補、中学校社会科教員、そして、教員養成大学において教師教育に携わることができ、教育学の道を一筋に歩み続けてくることができた。

2-3. 実証を示すことが最大の批判

仏教教育思想の研究に沈潜する唐澤に浴びせられた「あなたは頭が少し変ではありませんか」というような罵詈雑言は、『教育博物館』の研究に対しても容赦なく投げつけられた。曰く、「教育学者がとうとう古道具屋に成り下がった。」等々。これらに対して唐澤は知己を百年の後に求め、ただひたすら学道に精進した。お側に仕えていた筆者が最も驚いたことは、新聞に批判記事を書かれた唐澤が、一向に動ずる気配がなく、新聞に目を通してから、さっさと次の仕事に打ち込んでいたことであった。

「土井君、本当の批判というものはね、自分がやって見せること、実証を示すことなんだよ。これが最大の批判というものだ。大きな声でわめいているような者に惑わされてはならない。」と。

3. 人間形成における“もの”と“ところ”

3-1. “もの”を通して“ところ”に迫る唐澤富太郎の物心一如の教育学研究

唐澤は63歳の定年後、『教育博物館』の仕事に立ち向かった心境を次のように述べている。「現在の私の全エネルギーを投入してこそはじめてできるものであることを日々肝に銘じているのである。これほど私の情熱をかきたてる研究はもうないような気さえするのである。私は元来視覚型で聴覚型ではない。若い日、画家を志望したのもこうした理由によるのであるが、この『教育博物館』は、私のこの天性に最も適した仕事であるという思いが深いのである。それだけ何かわくわくした情熱が沸き上がってきて、湧き出る構想をまとめる楽しさは何ものにもかえがたいものがある。」⁽¹¹⁾と。

このような何ものにもかえがたい唐澤の楽しさは、一体どこから湧き出てきたのであろうか。その源泉こそ、たくさん集めた資料そのものであり、資料がこんこんと語りかけてきたのである。唐澤は「資

料を多く集めてはじめてわかったことは、物には心がある⁽¹²⁾という確信であった。そして、『教育博物館』の仕事において「人間形成における“もの”と“ところ”、日本人の精神的側面と物質的側面、この両者の融合した姿を“もの”を通して表現できることを最大の課題⁽¹²⁾として、10年がかりの大業に立ち向かった。

大乘仏教における“もの”の捉え方は、常に3つの側面からその本質を把握しようとする。すなわち、空諦・仮諦・中諦の3諦である。これを輪島への調査研究において、塗師屋の店先において、唐澤が漆の原木に出会ったときの光景を例にして説明したい。長さ約1m、直径約20cmの漆の大木には、10本ほどの漆を掻いた傷跡があった。これを観た唐澤の心眼には、深山に分け入って漆を掻いた職人の“ところ”が空諦となって察せられ、姿形となって目の前にある原木（仮諦）と一体となって把握されたのである。使用済みの原木は、もはや焼却される運命にあった。しかし、この実物を日本文化の特色である漆や輪島塗の製作工程を学ぶ教材として活用するなど、日本人の形成という教育学研究の資料としてこれを観る（中諦）とき、それは単なる廃材ではなく、貴重な教育文化財となって蘇るのである。あの重い原木を輪島から担いで帰った唐澤富太郎の心中を、筆者は到底察することができなかった。

科学としての在り方を目指す教育学研究においては、仮諦の側面から因果を究明しようとする傾向が強いのに対して、唐澤は仮諦の側面からの単なる実証を超えて、仮諦と空諦が中諦のもとに一如している人間形成の実相を究明しようとして、渾身のエネルギーを注ぎ込んでいたのであった。このような物心を一如として把握しようとする教育学研究は、寂しさと不景気さを堪え忍んで大乘仏教を肉化した唐澤富太郎にして、初めてよく為し得た研究であったといえよう。教育学研究の王道を歩んできた唐澤が、『教育博物館』を通して示した本当の物を知るという道は、物心一如の実物教育であった、と考えられる。

3-2. 西田幾多郎の“物となって考え、物となって行く”を実証した『教育博物館』

唐澤はかつて、西田幾多郎(1870-1945)の高弟、東京教育大学教授・下村寅太郎(1902-1995)の邸宅を訪問したことがあった。その玄関に「人は人 吾は吾なり とにかくに 吾が行く道を 吾は行くなり」という句が掲げられているのに出会った。これは下村の恩師西田幾多郎が詠んだものであった。この句に釘付けになりながら、唐澤は『教育博物館』という前人未到の教育学研究への道を歩み抜く決意をさらに一層堅固なものにした。西田幾多郎が困難な哲学研究に取り組んでいた時に詠んだもう一つの句に、次のものがある。「ひはくれて みちとほけれど ともかくも けふけふばかりの なりはひはしつ」(西田幾多郎記念哲学館)。西田哲学は日本人による初めての西洋哲学と東洋哲学を止揚した哲学として高く評価されている。では西田哲学の究極とは一体どのようなものであったのか。その究極を表現した西田幾多郎の言葉が、信濃教育会館講堂の入り口に西田の直筆で掲げられている。それは「物となって考え、物となって行く」という至言である。

このことについて、東京大学・青山学院大学名誉教授、信濃教育会教育研究所長佐伯胖は、平成25年度信濃教育会教育研究所研友会総会において、「よい教師になるということ」と題して次のような講演を行った。「モノ的思考では、実践の前に『とりあえずいろんな物が使えるぞ』ということがあって、対象を動かしたり操作したりしてその都度目標が達成できる可能性を探るということですね。そういうモノ的に考えて、一生懸命モノを使って考える、モノに答えを探す、モノに聞いてモノの答えをモノから聞くという発想があるんですね。『文字的思考のこわさ』というものがある。それは、文字的にモノを考える癖がついちゃうと、……モノ的に考えていないんですね。これを具体的に、先ほど私の娘がやったように『絵に描いてごらん』と言うととたんに分かるわけです。……それは私たちがモノ的思考を

排斥して、『教えるということは言葉で考えるということ』、『文字で考えること』、『公式で考えること』、『概念で考えること』だと思ひ込んだ先生が、それを何とかしてモノ的思考をやめさせよう、やめさせようとした結果がこうなったんだということですね。

ここの講堂を出るときにですね、入り口にある『物となって考え、物となっていく』という西田幾多郎という哲学者の書いた碑ですね、なんというすごいことを言うんだと。

『物となって考え、物となっていく』、『これがほんとうのことを知るという道だ』ということをや西田幾多郎が訴えているんですね。ここを出るときにはすぐそこに貼ってありますから是非ご覧いただきたいと思います。ということで、私の話はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。⁽¹³⁾

かつて絵かきを志した唐澤は、物事を視覚的に、モノ的にとらえて絵で表現することが得意であった。小学生時代に書いた達磨の絵には、しょう(生命)が入っている、と言って褒められた。また、頼光の風絵などの作品も生涯座右から離すことはなかった。唐澤は、人間形成という教育学の研究においても、文字的な単なる実証では満足できず、それを越えて人間の精神の奥底にまで迫り、それを絵画的に表現しようとしたのである。『教育博物館』の7千枚の写真撮影に4年の歳月をかけて、撮影の角度や光の当たり具合などの細部にまで指示を出し、妥協することはなかった。ここに実物資料というモノを通して、モノ自身に人間形成の真実を語らせたい、という唐澤の新しい教育史開拓へのやむにやまれぬ願いがあったのである。まさに「物となって考え、物となっていく」という「ほんとうのことを知るという道」を、『教育博物館』において実証しようとしたものと考えられる。この大業は、大乘仏教の哲学を縦横無尽に肉化した唐澤にして初めてよく為し遂げることができた仕事であった、と考える。

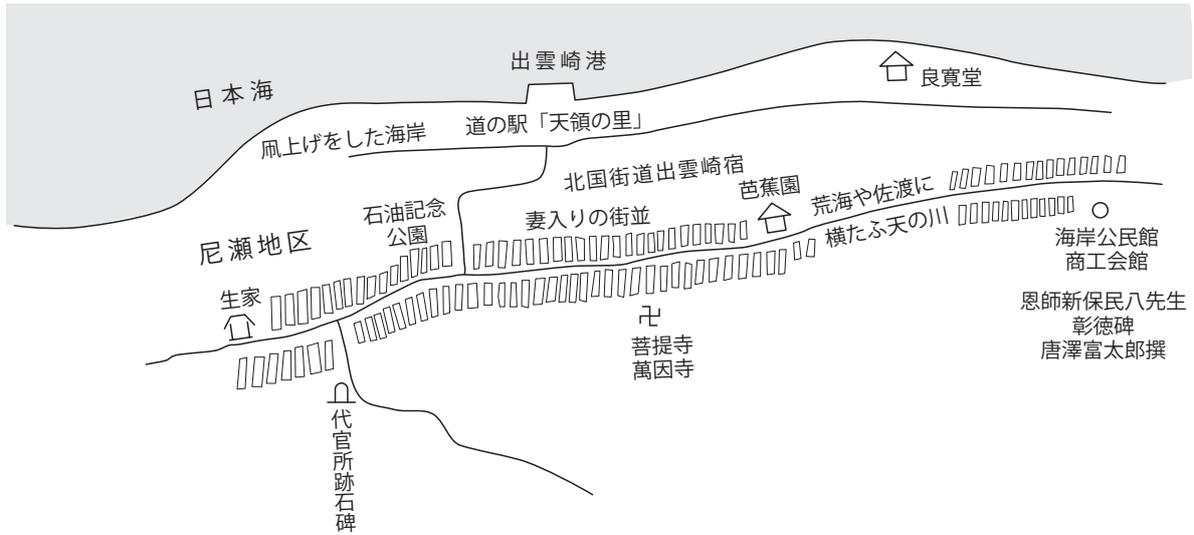
4. 幼少年期の出雲崎での人間形成

次に我々は、唐澤の教育学研究に立ち向かう忍耐強い人格、大きな仕事に挑戦する教育学的情熱、そして、“物”を見極める審美眼、“物”を通して“心”を把握しようとする美意識は、どのような風土において育まれたものであるか、『教育博物館』を構想した原動力と、新潟県出雲崎の自然的歴史的風土の関わりについて、究明したいと思う。

4-1. 出雲崎の自然的歴史的風土

出雲崎は、小高い丘と日本海に挟まれたわずかな平場に家と家が重なりあうように軒を連ねる北国街道の宿場町として栄えた。ここに元和2(1616)年、江戸幕府が越後で初めて7万石の出雲崎代官所⁽¹⁴⁾をおいて、広く越後の300ヶ村を治める幕府直轄の天領地となった。江戸幕府の財政を支える佐渡相川の金銀がここに荷揚げされ、北国街道を通して江戸まで運ばれた。また、諸国の物資を運んだ北前船の寄港地として繁栄し、江戸時代に越後一の人口密度を誇った。

8 当時は家の間口により税金がかけられていたことから、家の「妻」の部分が通りに面した「妻入り」という建築様式が用いられた。「つま」とは端を意味し、建物では大棟のはしの面を「妻」といい、大棟に平行な壁面を「平」という。建物の平側に玄関があるのを「平入り」というのに対して、建物の玄関が妻側にあって、これを正面とする建築様式が「妻入り」である。唐澤の生家は、出雲崎町の一番西にある尼瀬と呼ばれる地区にある。間口が3間ほどの「妻入り」の商家で、奥行きは20間以上もあるまさに「うなぎの寝床」のような佇まいであった。父はここで呉服商を営んでいた。唐澤が幼少年期を過ごした出雲崎の略地図は次の通りである。



出雲崎の略地図

4-2. 唐澤富太郎の出自と出雲崎の風土で培った不撓不屈の精神

唐澤は、明治44(1911)年4月7日、新潟県出雲崎町に父、大森(唐澤)政七、母、春日ゆきの9人兄弟の6男、末子として誕生した。自らをRich Boy(富太郎)と称した唐澤少年は、14歳までの幼少年期を出雲崎で過ごした。唐澤は生まれ育った環境と人格形成について、次のように分析している。「こういう土地に生まれ、育つと人はおのずと内省的、内向的になり、またねばり強く生きねばならないことを自然から教えられる。しかし、ひとたびことを始めると、途中ではくじけたりしないという辛抱強さ、ねばり強さを持つようになるものである。」⁽¹⁵⁾と。

唐澤が、雪に閉ざされた生活について強く印象に残っていることとして、冬に青い野菜を食べることがまずなかったということを上げている。どこの家でも秋までに野菜を乾燥させ、それを冬のために、沢あんなどの漬物にして貯蔵しておくのである。また交通の便が悪く、リンゴやバナナのような新鮮な果物を町では見ることもできず、病気になったときにだけ与えられる貴重品であったという。しかし、日本海で獲れる新鮮な魚とコクのあるおいしい越後米だけは最高の御馳走であった。食べ物一つにしてもこのような耐乏生活を余儀なくされる日々にあって、どの家庭の人々も忍耐強くつつましく生きるのが当たり前のことであった。

唐澤の生家から海岸までは約800mほどであった。冬の日本海の高鳴りは、一晩中ゴーと鳴り響いていた。出雲崎の厳しい風雪、怒涛逆巻く日本海の自然的風土に育まれて、唐澤は無類の忍耐力を身に付けたのであった。

4-3. 浜辺で風をあげ“大きな人間”を志す

父政七とは対蹠的であった母ゆきは、話し好きで万事が明るく活発な人であった。母ゆきの父、春日永太郎は、日本で最初の尼瀬油田における手掘りの開発者であった。唐澤が出雲崎尋常高等小学校の時、「油掘る町」と題して林立する石油櫓の絵を描いている。唐澤の母ゆきが語ったところによると、当時は「さながら大名ぐらしであった。」⁽¹⁶⁾という。母ゆきの口癖は、「男の子は大きな気持ちを持った人間に成長しなければならない。」⁽¹⁷⁾という一言であった。それには大空を仰ぐ風揚げが一番よいと言って、母はいつも風揚げを奨励した。それで唐澤少年は、よその子どもたちがとても買ってもらえない大風を買ってもらって、浜辺で揚げては思う存分に遊んだ。唐澤の小さな身体にはとても不似合いな大風

が風を受けて強く引っ張るので、風の強い日などは海の中まで体ごと引きずり込まれそうになり、辛うじて満身の力で踏みとどまった、という体験を何度もしている。

唐澤は、教育資料探求の旅で全国各地の特色ある凧を目にするとすぐに買い求め、博物館の天井に吊るして楽しんだ。『教育博物館』の「日本の児童文化」の解説で、唐澤は凧揚げと人間形成について次のように考察している。「風に吹かれてぐんぐん昇ってゆく凧は、いくら糸を伸ばしても決して天までとどくことはないのであって、このことを通して子どもは宇宙の大きさを身近に感じとるのである。また逆に高く舞い上がった凧の糸をたぐるときには、巻けども巻けどもなかなか降りて来ないものであるが、このことは子どもに、どんな大きなことも途中であきらめないうで、最後まで着々と努力を積み重ねることによってしか成就しないものだということを感じさせるであろう。」⁽¹⁸⁾ と。

4-4. 母ゆきから受けた最も大きな影響は“信仰の力”

出雲崎は、親鸞(1173-1262)が流された土地というゆかりもあり、さらには良寛(1758-1831)が生まれた土地がらでもあり、仏教信仰が根強い風土であるといえよう。唐澤は越後のこのような仏教的風土の中で育った。子どものときから母ゆきに連れられてお寺参りをし、説教を聞いたり、ローソク入りの八角灯籠が天井からいくつもつり下がっているお堂の中を見回したりした。親鸞についての説教が始まると、信心深い町の人々は、説教のあい間に念仏を唱えて、うなずきあいながら、ありがたい気持ちを表現するのであった。名もない民衆が親鸞の教えを聴聞して、生きる力を得ている姿を見て、唐澤は幼な心に感無量になるのを覚えた。

このような仏教信仰の体験が、後に東京文理科大学において篠原助市教授に勧められてナトルプの社会的教育学の研究に取り組んだものの、ドイツ哲学では人生を導く「主体的真実」に迫ることはできないうと悟り、東京文理科大学教育学研究科でのテーマを「教育における宗教的基礎」と定めた。この決断を促した体験こそは、幼少年期における仏教信仰の体験であった。唐澤は、「母から受けた影響のうちで最も大きなものは宗教の力ということであった。信仰の力がいかに人間を美しいものにするか、強いものにするかをいつわらない母の日常生活の中で感得させられたのである。」⁽¹⁹⁾ と告白している。朝夕仏壇の前でお経をあげる母ゆきのそばで、唐澤少年は小さい手をあわせる毎日を過ごして成長した。そして何か悪いことをしたときは、この仏壇の前で胸に手を当て、懺悔せざるを得なかったという。そして、他人がどう思うかというようなことに気を使うのではなく、「もっと深い仏に対して自分の良心の問題を考える」⁽²⁰⁾ ようになった。そして、仏と自分との絶対的な関係において、人生を導く「主体的真実」の核心をつかんだのであった。

10

唐澤は母ゆきについて、別に教育を受けたわけではないが、子どもを育てることの本質を深く把握し、実践した本当の教育者だったと深い感謝を捧げている。母ゆきへの記憶の糸をたぐってみても、ただの一度も叱られたことや勉強しなさいと言われたことがなかったという。また、9人のどの子どもに対しても将来偉くなれとか、何になれというようなことは一度も言うことはなかった。このような母ゆきであったが、ただ一度だけ学問について、ぼつりと口にした言葉があった。それは、唐澤が昭和12(1937)年東京文理科大学を卒業し、引き続き東京文理科大学教育学研究科に残ることになったことを告げたとき、「まだそんなに覚えなければならぬ字があるのか」⁽²¹⁾ とつぶやいたことであった。

4-5. 12畳間、大黒柱、樺の大戸、襖絵を観て芽生えた絵ごころ・美的鑑賞眼

唐澤の初心である将来絵かきになりたいという希望は、どのようにして芽生えたのであろうか。唐澤は「男の子だからというので、12畳間の真ん中で寝かされた。樺の天井の美しい木目、雪国らしい

大きな樫づくりの戸、絵のたくさん書いてある襖、こんな環境が大きな仕事をしなければならないという私のその後の気構えを養ってくれたような気がしてならない。そして自然に日夜ながめていた襖や屏風の絵などから絵ごころというか、美的観賞眼が養われ、将来絵かきになりたいという希望を持つようになったと思われる。」⁽²²⁾と回想している。

このような幼少年期の住環境において美的鑑賞眼を育んだ唐澤少年は、小学生時代は毎日かすりの着物のふところにスケッチブックを入れて、喜び勇んで絵を描きに出かけることを何よりの楽しみとしていた。大きくなったら絵かきになって、人間の魂を絵画で表現したいというような思いが浮ぶと、出雲崎の冬の激しい波しぶきを、夜の静寂のなかで聞きながら、眠れない夜を過ごしたこともあったという。

4-6. 16歳の蹉跎、兄の一言で絵かきの夢を断念して教育学の道へ

唐澤が5歳の時、10歳年上の兄は新潟師範学校に入学した。この兄は東京高等師範学校も卒業しており、出雲崎で高等教育を受けた只一人の人物であった。唐澤はこの兄を精神的指導者とし、深く信頼していた。その兄が、絵かきになりたいという唐澤少年に語ったのは、「横山大観位にならなければ飯が食えない。」⁽²³⁾の一言であった。これまで父からも母からも一度として言われたことのない夢を否定する言葉であった。唐澤少年は愕然とした。しかし、精神的指導者の一言に従うよりほかなかった。これは16歳の出来事であった。

苦悩のどん底の日々にあって、唐澤は一筋の光を見出した。それは小学校3年生と4年生の担任をしていただいた新保民八(1901-1958)の存在であった。絵かきがだめなら新保のような教育者になりたい、という気持ちにかられて教育学に志を立てたのであった。唐澤は小学校時代の代用教員、新保民八のことを教育的天才であったと言ってはばからない。唐澤にそのような圧倒的な影響を与えた新保とはどのような人物で、どのような教育をしたのであろうか

新保は、明治34年新潟県出雲崎生まれ、能生水産学校を卒業した後、校長からの懇請によって、母校出雲崎尋常高等小学校において2年間代用教員として勤務した。ちょうどその2年間、唐澤は新保に担任していただいた。新保のヒューマニズムに唐澤が最も感化された出来事は、次のようなものであった。I君という父親が漁師の同級生がいた。彼は父といっしょに舟に乗って徹夜の漁に行き、帰ってきて学校へ出てくるので、教室でつい居眠りをした。それを見た新保は、普通なら叱るところをあべこべに、「君は実に偉い。お父さんの手伝いを徹夜で一生懸命やってきたのだから眠いのは当たり前だ」⁽²⁴⁾と言って褒めたという。こういう教師の態度がクラス全体のヒューマニズムを養い、唐澤たちのクラスは大きく成長したという。

唐澤たち同級生は後年、「新保民八先生頌徳碑」を建て、唐澤が撰文した。現在出雲崎町商工会館の入り口に置かれている。I君は、後に東京に出て大会社の社長となり、数百人の陣頭に立って指揮をとっている。そのI氏が唐澤博物館を訪問し、竹馬の友が談笑する席に立ち会い、教育の偉大さに深い感動を覚えた。

III. 結論

本論の第1章から第3章までの論考を通して、次のことを明らかにすることができた。すなわち、唐澤富太郎という教育学者が、定年を機に「解放された自我への出で立ち」、と宣言して立ち向かった『教育博物館』の仕事を通して究明したことは何であったか。それは、“物”(仮諦)には“心”(空諦)があり、物心は一如(中諦)しているという仏教的世界観に立脚した“実物教育”の重要性を訴えること

であった、と考える。

唐澤は、一度は挫折した絵かきへの夢を、失うことなく沈潜させ、抑圧した自我を、『教育博物館』4巻の成就に向けて爆発させた。収集した実物資料をカラー写真で美的に表現する仕事に打ち込んでいるとき、唐澤は絵かきになりたかった幼少年期の夢を実現しているかのような悦びに浸っていたのではなかろうか。

数万点もの複雑多岐にわたる教育資料を唐澤は、「日本の児童文化」、「日本の学校文化」、そして、「日本の生活文化」の3巻としてまとめた。この分類方法に、唐澤の持論である教育とは人間形成である、教育とは生涯学習である、という哲学が遺憾なく発揮されている。唐澤は、数万点もの教育資料の山に埋もれていても、3つの分類の視点は常に明解であった。また、唐澤の“実物”を観る眼には、空諦・仮諦・中諦の3つの観点から全体が統一的に把握されていた。これは唐澤の教育学研究のスケールが如何に大きかったかを物語るものである。

唐澤は、ユネスコの教科書会議とその後の西欧16か国の旅を終えて、日本の教育文化に関する資料を今のうちに収集しなければならない、という使命感に燃えた。日本の国内を探し回ることなど、世界を回することを考えれば何でもない。こう考えて、全国各地へ資料収集の旅に出た。その手伝いに汗を流し、最も熱心に唐澤を助けたのは福沢行雄と石島庸男(元山形大学教育学部長)であった。石島の学生・院生時代は常に唐澤と共にあった。石島は唐澤を「走り続けさせたもの」と題して、次のように述べている。「先生は糖尿病の薬を飲みつつ時には電車に乗ることさえ嫌な気分になり、そのスピード、音に耐えられないとまで言われながら、資料探求行は止まなかった。論文や本の原稿が書けない時は資料蒐集が救いにもなっていたようだ。が、先生の中には私には分からない絶対者が存在し、自らが何もせず時を過ごすことを許さなかった。そして、絶対者とともに仏教的正義観、平等観といったものがあつたように思う。」⁽²⁵⁾と。石島は後年、唐澤の資料収集の手法にならって、旧師範学校校舎を活用した「山形県教育資料館」を建設している。

本論の第4章の論考を通して、本稿の第2の目的である唐澤の教育学的情熱の源泉は、一体どこにあったのかを究明した。すなわち、唐澤富太郎が『教育博物館』4巻を結実させた原動力こそ、幼少年期を過ごした出雲崎の自然的歴史的風土によって培われた無類の忍耐力、絵かきへの夢と挫折、大きな人間への志、母ゆきから享けた仏教信仰、そこからつかんだ人生を導く「主体的真実」の核心、これらのことに由来していたものと考えられるのである。

謝辞

本稿の査読者2名から愿慇なる査読コメントをいただいた。それに随い従前の原稿を大幅に書き改めた。これによって、本稿の意図をより明確に論述することができた。ご指摘いただいた査読者に甚深の感謝を申し上げる。

12

唐澤博物館館長は、本稿の執筆ならびに学生の博物館見学に全面的に協力してくださった。ここに記して感謝申し上げる。

最後に、教育学の師、唐澤富太郎先生の13回忌の墓前に本稿を捧げ、その師恩・学恩に報いることができれば、この上ない喜びである。

【注・引用文献】

- (1) 大浦猛(2001)『東京教育大学教育学部教育学科』学芸図書 p.105
- (2) 唐澤富太郎(1970)『執念 一私と教育資料の収集一』講談社 p.5

- (3) 唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究』ぎょうせい p.445
- (4) 『東京教育大学閉学記念誌—教育学部—』東京教育大学教育学部
昭和53年3月15日 pp.45-46
- (5) 唐澤富太郎(1970)『執念—私と教育資料の収集—』講談社 p.237
- (6) 同上書 p.150
- (7) 同上書 p.150
- (8) 土井進(2005)「教育学の師にお仕えし心に刻んだこと」唐澤博物館十周年記念「愚徹」編集部『愚徹
唐澤富太郎 人、そして仕事』 p.171
- (9) 同上書 p.171
- (10) 同上書 p.171
- (11) 唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究』ぎょうせい p.446
- (12) 同上書 p.447
- (13) 佐伯胖(2013)「『よい教師になる』ということ」『信濃教育会 教育研究所会報 第54号』 pp.11
- (14) 出雲崎代官所跡に大きな石碑が建てられることになった時、揮毫を依頼された唐澤は墨痕鮮やかに見事
な碑文を書き、東京教育大学教授 唐澤富太郎と署名した。
- (15) 唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究』ぎょうせい p.4
- (16) 同上書 p.24
- (17) 同上書 pp.6
- (18) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』解説 p.27
- (19) 唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究』ぎょうせい pp.7-8
- (20) 同上書 p.8
- (21) 同上書 p.8
- (22) 同上書 pp.6
- (23) 同上書 p.15
- (24) 唐澤富太郎(1984)「新保民八一圧倒的な影響を与えた代用教員—」唐澤富太郎編
『図説教育人物事典』中 ぎょうせい p.91
- (25) 石島庸男(2005)「先生の資料蒐集 ちょっといい話」唐澤博物館十周年記念「愚徹」編集部『愚徹
唐澤富太郎 人、そして仕事』 pp.208-209